

書 評

仲間秀典著
『チャーホフの肖像』

腰 原 哲 朗

サハリンへの旅

たとえば中村白葉訳『チェーホフ全集』18巻が出版されたのをうけて、昭和8年(1933)島崎藤村は『夜明け前』執筆に傾注していたが、そんなさなか藤村は、朝日新聞に白葉のライフワークであるチェーホフ訳に声援をおくり、また感想集『桃の雫』で、外国作家の中でもチェーホフはもっとも好きな作家の一人だ、と記した。

同じころ沖縄出身で樺太に職をえていた津嘉山一穂という詩人は「チェホフの地獄島」という前衛詩を発表している。発表した雑誌は、松本市浅間温泉の高橋玄一郎が編集にかかわった非合法的な詩誌「リアン」(Rien) 15号(1933)である。詩作品の一部を示す。

「彼が地獄の千八百九十年 海には流水が崩れ 陸には流刑植民の兇悪な村落がみえる
刃物と酒 獯猛な生活の鎖のなかに 血は血を欲し ツアの氷は更に血を欲す」

私はこの作品をもとに琉球新報社を会場に開催された「山之口獮誕生100年祭」で「パナリの詩人」と題して発表した。パナリ(離島)で活動した気骨ある詩人津嘉山一穂を評価するためである。一穂はのちに樺太から台湾にわたり、治安維持法違反で取り調べをうけた。

このリアンという雑誌に最後まで参加した一穂のほかの三人は検挙されている。その中心人物竹中久七の卒業論文はオホーツク海でトラブルが続く実態を経済学の立場からまとめた「蟹工船の研究」で、これは「蟹工船をめぐる商学と文学」(松商短大論叢49号)で私も紹介したところである。

また高橋玄一郎に『現代日本詩史』刊行を要請に浅間温泉に東京からやってきたのが山之口獮である。書評から脱線するが小林多喜二時代を想起させる意味で、前おきとする。

医家文化

本書は比較文学の視座が中心ではなく、医師であり結核症患者だったチェーホフの伝記ともいえる足跡が中心である。殺人事件の検死やペスト感染症に関心をよせながら、文学への道へと進むチェーホフの足跡は、第2章「二足の草鞋」で展開される。

いったい二足の草鞋というと一般に、やゝ批判めいたニュアンスをとともうが、森鷗外をもちだすまでもなく有能であることの証ではないか。鷗外が弘前の医官を伝記風に小説化したように、沖縄出身で医師でもある著者もチェーホフの医学と文学の二重奏に自分を重ねあわせての論述であろう。

医師で文学にかかわる人は、加藤周一、安部公房、『鷗外と茂吉』の著者加賀乙彦ほか多数いる。「医家芸術」などに参加し検視詩集『二重奏』で孤独な老人の死をみつめる谷口謙もその一人、同詩集から一部を示す。「午後四時よりK署霊安室にて検視 室温一七度 直腸内温度三六度 全身硬直なし 背面 淡赤紫色死斑少々 知人 患者の検視は嫌 無念の思いもあって」

木曾出身の医師で少年院などで精神衛生にかかわり小説集『鳶の翳り』で「非行と犯罪というものに惹かれることのある全ての人に本書を捧げる」とする杉本研士や、農村の地

域文化に尽力する佐久病院の場合など、日本のチェーホフは大勢いる。

二足の草鞋は医師ばかりでなく、柳田国男あり、鷗外研究の日銀理事吉野俊彦あり、というわけで、二足ノワラジを批難する輩は、一足の草鞋さえ満足にはけないゆえのジエラシーかと思えてくる。

さて本書で注意をひくのは、第3章「兄の死とサハリンへの旅」および第6章「ドレフュス事件への関心」である。チェーホフが1890年に周囲の心配をよそに、モスクワからシベリヤをめざしバイカル湖を経てサハリンに達した大旅行は、驚きに値する。シベリヤ鉄道も樺太鉄道も全線開通していない時代、馬車や船によつての辛酸をなめた旅、なぜ苦難の旅であつたのか。サハリンで死刑囚と監獄の実態を調査し、炭鉱労働者や貧しい島民の生活をつぶさに見聞して、健康衛生面に心痛み心配するチェーホフである。敬愛していた兄の死や地獄島で生涯を終える人々への、いわば実存主義的な愛によるとしても、それにしてはサハリンをめざしたのはなぜなのか、その謎に本書はせまる。

さまよえる神経

松川裁判で奮闘した廣津和郎の卒業論文はチェーホフにかんしてで、以来多くのチェーホフへの言及がある。「チェーホフも未だに私の心を捉えてしまつてゐる偉大なる幽霊の一つだ」（わが心を語る）

チェーホフがみたロシアの墮落ぶりと、殺したくなるほどの墮落した和郎の実兄とを重ねて性格破産者論をととなえたのは、理由のあることであつた。チェーホフの作中に出てくる人物はみんな性格をもっていない。ただ神経の暗示のまま動いて悲喜劇を隠している、といった「神経病時代」の廣津和郎の目には貧乏作家の父柳浪と性格破産の兄と、それに反してチェーホフが敬愛した兄との比較が当然意識にのぼつたであらう。「さまよへる琉球人」という作品に対し、生活苦にあつた沖縄青年同盟が和郎に抗議文を出した。その抗議文にも反省をこめて誠実にこたえる姿勢が松川裁判へとつながつていったとおもう。

「自分が「さまよへる琉球人」の中で、沖縄県といふものに対して持つ同情とか厚意とか云ふものが、如何に第三者的な生温い、身には痛痒を感じない人間が、遠くから他人の痛みに同情してゐるといふだけの薄っぺらなものであつた事を恥しく思ひます」と記す。

こうした姿勢はチェーホフの場合も同様に苦難な現実を生きつたロシア農民のフオークロア的思想を理解する、農奴から脱出したチェーホフの祖先の血につながると著者はいう。だからサハリンから帰つた翌年の大飢饉の発生に際して、トルストイの救済活動と同じく医師として自身健康を害しながら奔走した。そうした民衆へのまなざしは、第4章「農民救済活動」や第8章「労働者への眼差し」にくわしい。

階級出身へのこだわりを止揚しようとした有島武郎をはじめとする白樺派の一人を論じた「志賀直哉論」で廣津和郎は、チェーホフと同様に志賀直哉は論じにくいとする。トルストイやドストエフスキーは思想や人生観をかなり露骨に表示しているが、チェーホフは「作品の底深くひそめてしまつて、一撫や二撫でその上を撫でただけでは余りに滑か過ぎて、手に応へるものが何もない。その癖ひと度その滑かな表面から奥に突き進まうとして見ると、今まで単純に思はれてゐたものが、恐ろしく複雑な様相を表して来る」からだ

する。そういう論じにくいチェーホフの基礎的作業をはたしているのが本書である。

『開高健の憂鬱』（仲間秀典著）

とにかく論じにくいのは、下意識のゆらぎである。西脇順三郎は『超現実主義詩論』で詩を論じるは神様を論じるに等しく危険としたが、シュルレアリストにかぎらず、画家など一部芸術家の潜在意識をうかがうのはむつかしい。藤森成吉『知られざる鬼才天才』にかぎらず人の行動表現欲は、ときとして自殺の系譜をなし、個性と常識の境界を混乱させる。たとえばロシアに留学して早稲田文学で活躍した片上伸の末弟だった新鋭の評論家竹内仁が結婚の破約に怒って許婚の両親を刺殺して自殺したという例のように。そこで注目されるのが病跡学である。

先に記したリアン誌同人で太宰治の主治医だった中野嘉一『前衛詩運動史の研究』も病跡の一端を示す。リアン誌の表紙を描き自殺した古賀春江の病跡についても、川端康成とともに中野嘉一は関心を寄せる。というわけで、そうした面からチェーホフについても照射してほしかった気がするが、その必要はないのかもしれない。

それというのも著者にはすでに『開高健の憂鬱』（文芸社）で、病跡学研究の実態、開高の性格類型、開高の離人症などについて論じていて、著者の病跡学への見解はそれで充分だとも考えられる。にもかかわらず著者もいうように医師であるチェーホフが死期の迫った愛する兄を放置して旅に出るのは、職業倫理上理解しがたい。兄の死に同じ病に罹患している自らの未来の姿を重ねあわせ、悪天候のなかサハリンをめざす死への情熱ともいべき意志は、うつ病の裏返しかなどと素人の俗人の推測は勝手にはたらいってしまう。

開高健と同人誌を出し親交のあつかった近代文学研究書誌学の第一人者谷沢永一氏も、うつ病への注視を私にもらしたことがある。生への情熱がみなぎる谷沢永一『署名のある紙礫』には有名な「くたばれ！大学紀要」の一節がある。匿名ではない提言だ。「どんな愚劣なものでも、書きさえすれば無審査でのせてもらえる特権を楽しんでいる。そして、学問の進歩になんら寄与しないぐうたら作文の数だけふやし、教授へ昇進する足がかりにしようとするわけだ。（中略）各大学の程度の低い紀要類は全部いちど刊行を停止し、全国的な学会誌一本にしぼり、きびしい審査をほどこす必要がある。」

こうした警鐘をうけとめて上田正行『鷗外・漱石・鏡花』は上梓されている。かつて詩人の関根弘が「くたばれ八幡製鉄」を書いたことがあるが、何によらず量から質への転化を心しなければならぬ。本来ならばボツになるこの拙文だが、当「紀要」4号の書評にならってのことである。

政治と文学（論争）

脱線ついでにサハリンにこだわる。というのもオホーツク海では殺害におよぶ漁船の^だ拿捕までおき、天然資源にとまなう島々の領有をめぐる外交問題は複雑化している。近年、チェーホフならば北方四島についても何と言うだろう、と奇妙な思いにかられるから

である。

新井白石『蝦夷誌』や『赤蝦夷風説考』などにみられるように異民族の住む北方の地理は関心の的であった。やがてシベリヤ出兵やシベリヤ抑留で近代史を残酷にいろどることになる。いったい拿捕・拉致・連行・誘拐・抑留・収容（残留）・監禁・幽閉といったように類語が想起されるほどに、歴史は悲劇的だ。多くが戦争とむすびついて、北方ばかりでなく南方でも、たとえば琉球弧の湾口で身動きできない魚雷艇に閉じこめられた島尾敏雄の「死の棘」も戦争の後遺症ともいべき狂気につらなる作品だ。その島尾敏雄を、ウィーンの心理療法の役割に似て、図書館長に迎えたのは、初期リアン同人だった児童文学の椋鳩十であった。

ドレフュス事件にせよ、「戦陣訓」にせよ文学と政治の関係を問う論争にみられるように微妙だ。芸術家は弁護が必要になった時のみ政治に関与すべきというチェーホフの見解にそって著者は記す。開高健の行動についても高見順との類似性をみながら言及する。杉浦明平や『花田清輝論・流行と不易』の著者平野栄久氏に言及しながら。

直接選挙に立候補したりするのでなく、チェーホフのように大領地で工場を営むモロゾフに一日12時間にもおよぶ労働条件の改善を求め「産業医学」や「労働衛生」の先駆をなす働きなどが、間接的とはいえ文学者の政治責任ともいべき行動であろう。戦争責任にならなければ。

ドレフュス事件の弁護で権力側の圧力に抗して活躍したエミール・ゾラは、日本の自然主義文学とちがって、労働者階級への熱い視線から社会主義思想につらなる発想へと進んでいく。ゾラ『労働』が堺利彦訳で出版されるように、こうしたゾラの姿勢はチェーホフと共通していて、たんに作品中心だけの作家とはちがう歴史認識のふかさを示している。

桜の園

名作が生誕する事情を記した第8章は圧巻だ。モスクワと冬のヤルタを往き来し結核性肋膜炎による倦怠感のなか、妻の助力をえて原稿用紙を広げて少しずつ空白を埋めていった。日に2行しか書けないときもあった。

ほぼ脱稿してからも、チェーホフの胸や腸の具合は劣悪で、血痰と胸痛、下痢と腹痛に苛立っていた。その意味で、チェーホフにとって『桜の園』は身を削るようにして書き上げた作品といってよく、その上演には人一倍深い思い入れがあった。（中略）

いまやチェーホフ劇場とも呼称されるようになっていたモスクワ芸術座は、病魔で衰弱している作家に新しい作品を要請していた。

こうした状況のなかで成功した作品だけに日本でも評判となった。白井吉見とチェーホフ劇に接した松本克平は『日本社会主義演劇史』で築地小劇場での「桜の園」上演のようすを回想する。また『雨雀自傳』で秋田雨雀は、露文出身の娘婿上田進からツルゲーネフやチェーホフを原文で読んでもらい、二葉亭四迷も手がけたエスペラントを学び、芥川龍之介の自殺に衝撃をうけながらモスクワへ向かう。モスクワでは小山内薫とあい、メイエルホリドに接する。さらにハリコフ会議で有名なウクライナで監獄視察、その付属劇場で囚人による創作劇がおこなわれていることに注目する。そして一行はチェーホフの芝居の

科白をまねて、モスクワへモスクワへと叫ぶのである。それほどにチェーホフ劇は人気を博したのである。

それだけにチェーホフの葬儀は、チェーホフの生涯にふさわしい光景をていした。したがって本書は第9章「私は死ぬ」をもって一書はしめくくられることになる。

医師として患者として作家として

いわゆる書評からはずれすぎたが、本書の巻末に掲げられた主要参考文献にみられるようにチェーホフに関する著書は数多い。そうした状況をふまえて、著者は、医師、患者、作家という観点から論じている。最終章を飾る一節はたとえば次のようだ。

しかし、結核患者としてのチェーホフはこのような精力的な医師像と異なり、気弱で消極的な態度ばかりが目立っている。チェーホフは、臆病な患者だったのである。結核がその頃有効な治療法の無い不治の病で、この疾病を直視することが心理的に難行であったことを考慮したとしても、病者チェーホフの言動はあまりにも弱々しい。あるいは、このような彼の生涯にわたる逃避的振る舞いは、医師であったがゆえに誰よりも自己の末路を明瞭に意識していた結果とも言えるかもしれない。(中略)

このようなチェーホフの文学を語るうえで看過できないことは、彼が医学を修め、多くの患者に接した事実であろう。それは、単に作品のなかに患者や医療関係者を登場させるという表面的な事象だけに留まらず、それらの診療体験が人間の本性や生の実相への根源的理解に対する豊饒な涵養剤となったことである。そこからチェーホフは倦怠の美学を漂わせた独自の文学世界を築きあげたと考えられ、そこに作家チェーホフの幸運を見出すことができよう。

「倦怠の美学」されど本書に ennui の構図はない。

〔松本大学出版会、2005年11月刊、A5判、123ページ、本体定価2,000円〕